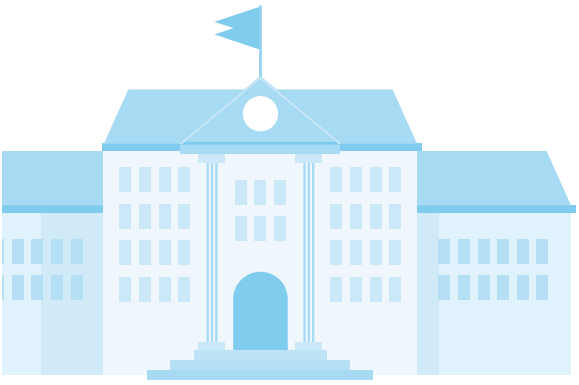
国際的な大学教育の展開と国際寮

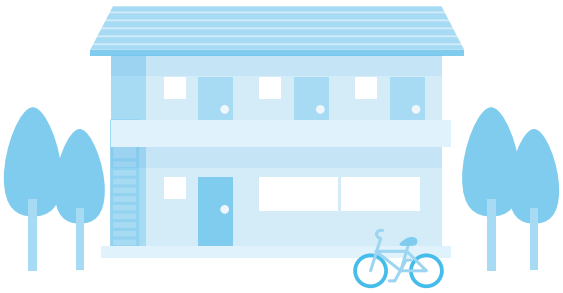
大学が所管する学生寮は、これまで主に学生に対する経済的な支援や、安心安全な生活環境の提供といった側面から運営されてきた。近年では日本国内における18歳人口の減少に伴い、一つの方向性として海外からの留学生受入れを積極的に推進する大学が増加しており、これと連動して、多様なスタイルの国際寮が続々と誕生してきたことは記憶に新しい。

「大学時報」においてはこれまで、学生寮を活用した国際交流、グローバル人材育成の取り組みなどについて、数次にわたり国際寮をテーマとして取り上げてきた。今回は特に、大学が目指す国際的な教育展開と国際寮の関

係にスポットを当てた企画となる。

今回の企画では、大学自身が国際性を体現する特徴を有する大学、総合大学として留学を必須とする学部を有するなど国際交流に力を入れている大学、1年生は全員入寮し、そこでの学びを重視している大学に執筆を依頼した。それぞれの大学において、国際的な大学教育の展開に、国際寮はどのような役割を果たしているのか——国際寮の魅力と可能性を知ることはもちろん、今後各大学が新たな教育展開を探る際のヒントを得る機会としたい。





CONTENTS

学修・居住一体型キャンパスと人材育成
熊谷 嘉隆　公立大学法人国際教養大学理事、国際教養大学副学長

共に暮らし、共に学ぶ、国際学友寮
向井 剛　公立大学法人福岡女子大学理事長、福岡女子大学学長

国際教育寮「有光寮」の開設と新たな教育の展開
林 智義　関西学院大学国際連携機構事務部課長（レジデンスセンター担当）

人的教育資源を活用した教員同居型学生寮
木内 佳奈子　神田外語大学学生支援部シニアマネージャー

学修・居住一体型キャンパスと人材育成

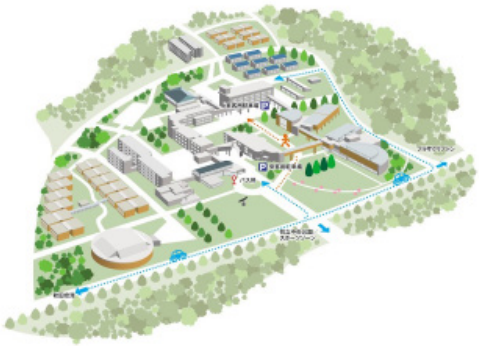
熊谷 嘉隆
公立大学法人国際教養大学理事、
国際教養大学副学長

1 概観

国際教養大学は、2004年4月にグローバルリーダー育成をミッションに掲げ、秋田市中心部から車で約30分の場所に設立された公立大学法人で、1学年の定員175名、正規学生数800名ほどの小さな大学である。学部の構成は、国際教養学部の下にグローバル・ビジネス、グローバル・スタディズ、グローバル・コネクティビティの3領域を配し、国際教養教育をカリキュラムの核心に据えたリベラルアーツ大学である。全て英語による少人数授業、1年間の留学義務、教員の半数以上が外国籍（2023年1月時点で57%）、24時間365日開館の図書館など、開学から現在に至るまでさまざまな挑戦を続けている。

2 育成する人材像

本学ではグローバルリーダー育成というミッションを見据え、広範な知識、論理的思考力、問題解決力、多様性の理解、高貴なる責任感、そして行動力を身に付けるべきものとして掲げている。要は知力とともに人間力強化も重視しており、そのために教室での学びだけではなく、大学生活4年間で経験する全てを貴重な学びの機会としている。特に人間力の強化においては、勉学以外に課外活動、ボランティア、インターンシップ、地域貢献、アルバイト、そして海外留学等のどれもが大事で、その中でも特に学修・居住一体型キャンパスの果たす役割は極めて大きい。［図1］



［図1］キャンパス外観

3 学修・居住一体型キャンパス

本学では全新入生が、義務寮である「こまち寮」に1年間居住し[写真1]、その後も全学生の9割近くがキャンパス内の「グローバルヴィレッジ」[写真2]、「さくらヴィレッジ」[写真3]、そして2022年3月に完成した「つばきヴィレッジ」[写真4]の3つの学生宿舎に居住する。「つばきヴィレッジ」開設に当たっては、学生による自発的協働文化を醸成するため、共有のリビング・ダイニングを取り囲むように12の個室からなるユニット制居住環境にした[図2]。「つばきヴィレッジ」に住む学生たちは、ゴミ出し、シャワールームやトイレ、リビング・ダイニング、廊下などの共有部の清掃、騒音管理などについてユニットごとにルールを作り、自主的にユニットの運営を行っている。

また、学生寮・全ての学生宿舎にRA（Resident Assistant）を配置し、各宿舎の運営補助を担っている。RAは担当する宿舎に居住し、各種業務を行うことにより寮費免除を受けることになっている。RAの採用に当たって

[写真1]こまち寮

[写真2]グローバルヴィレッジ

[写真3]さくらヴィレッジ

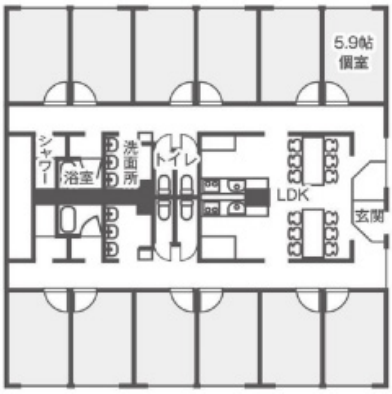
は、本学学生課職員による面接を経て、その業務内容や心構えなどがガイダンスされる。RAに従事することは教育上極めて重要で、宿舎内の各種トラブルやルールを守らない学生への指導、学生と学生課間の円滑なコミュニケーションを図るなど、やらなければならないことは多いが、RAはこれら一連の業務を通して調整能力やリーダーシップ力を身に付けている。

ちなみに本学は、世界51カ国・地域の201校の提携校からやってくる短期留学生(全居住学生の約4分の1を占め、1学期もしくは1年間本学で学ぶ)とほぼ全ての都道府県から集まる日本人および外国人正規学生によって構成されていることから、言語、方言、宗教、文化、生活習慣、食文化も多様であり、世界の多様性もさることながら日本各地の豊かな地域性も、キャンパスに住むことで体感できる[写真5]。

一方、国内外から集まった若者が共同生活をする上では(多くの学生はルームシェアをしている)、前述のとおり、言語、宗教、考え方、習慣、生活パターンも多種多様で、意見のぶつかり合いは日常茶飯事であるが、それでも学生たちは相手と向き合って話し合いつつ、折り合いをつける術を身に付けていく。

また、多くの学生が学内に居住していることで自然発生するピアプレッシャー(仲間からの圧力)も教育上極めて重要である。本学では、入学時からTOEFLの点数による英語集中プログラム(English for Academic Purposes: EAP)の1~3までのクラス分け、留学条件のTOEFL ITPテスト最低点数550点の取得といった関門、講義前に課される課題文献の読了、大量の課題、英文によるレポートの提出等、絶えず勉強しなければ進級、留学、そして卒業もできない。その

[写真4]つばきヴィレッジ



[図2]つばきヴィレッジ見取り図

ため、学生たちは図書館、そして部屋で必死に勉強しているが、その姿が良い意味でのピアプレッシャーになっている（4年間で卒業する学生の割合は毎年約50％）。要は必死で勉強している仲間が周りにあふれていることは、自ら勉強する強い動機付けになっており、そしてそのことは大変な大学生活を一緒に乗り越えるという一体感も醸成している。

また、本学は小高い丘陵地の林の中に位置しており、周りにはほとんど何もないことから、都会の大学に通学する学生たちが享受している娯楽施設は一切ない。そのことは勉強に集中できる環境にあると同時に、各種課外活動にしても学生たちが自ら創意工夫し、大学生活を実り豊かなものにする必然的な動機付けにもつながっている。それ故、大学祭、各種クラブ活動、地元との交流、秋田県内自治体やNPO、企業との連携活動は極めて活発である。

［写真5］キャンパス風景

以上、本学での学びにおいては、真剣な学問探求はもちろんのこと、寝食を共にしながら互いの意見をぶつけ合い、時には怒り、苦しみ、悩み、そして喜びを共にし、仲間と一緒にさまざまな困難を乗り越えつつ、人として成長することも極めて大事な大学教育と位置付けている。

4 今後の展望

本学は2024年に開学20周年を迎えるが、人に例えればやっと青年期に入ったばかりの年齢である。まだまだやらなければならないことは山積しているが、特に今後は地域との連携をどのように大学での学びに組み込み、グローバルとローカルの接続性を留学生と日本人学生が現場で考え、体感する機会を強化していくのかを協議している。それらを通して留学生と日本人学生が共に学び、議論し、そして遊びつつ、教室で、フィールドで、各学生宿舎で、知力と人間力を育むダイナミックな多文化共生コミュニティを、この木々に囲まれた自然豊かなキャンパスで醸成していくつもりである。本学の挑戦はまだまだ続く。

共に暮らし、共に学ぶ、国際学友寮

向井 剛
公立大学法人福岡女子大学理事長、
福岡女子大学学長

はじめに

その昔、ヨーロッパで創設された大学は、各地から集まる学生たちが教授陣と寝食を共にしながら、学びを深める場であった。たとえば、イギリスでは、大学(University)を構成する共住の場である学寮はホール(Hall)と呼ばれていたが、今もなおオックスブリッジには、カレッジ(College)に混じってその名が残っている。そして出身地域や国に応じて、ネーション(Nation)と称される学生仲間の集団が組織され、交友が図られていた(スコットランドや北欧の大学には、この組織名が現在も残る)。福岡女子大学は、教育の原点である「共に暮らし、共に学ぶ」この姿勢を現代に甦らせ、アカデミック・コミュニティづくりの基盤に置くことにした。全寮制の意図はここにある。

「国際学友寮なでしこ」には、国内のみならず海外からも多様な背景をもつ学生が集まる。さながら小さな地球である。さらに小さな町である、4人が衣食住を共にする各ユニット(フラット)では、食卓にのぼる郷土料理を味わうなかで、日本語と英語を中心に、独語、仏語、フィンランド語、タイ語、中国語、ベトナム語、韓国語など、同居の国際学生に応じた様々な言葉が飛びかう。授業の振り返り、サークル活動、将来像、抱える悩みなど、様々な話題を交えて、互いの理解を深めあう貴重な時間となる。初めての寮生活は、学生に程よい孤独の時間を提供し、自分を見つめ直し、内省を促す。また、寮のルールに従って生活しながらも、互いの生活習慣、行動様式の違いに驚き、意見の衝突や誤解が生じるであろう。これまで築き、慣れ親しんできた自身の日常に綻びが生じる。こういう時にこそ、自分のなかに変化(成長)が生まれるのである。異国の仲間とは、この違いはなおいっそう大きい。本稿では、大学の概要と共に、寮が本学の教育理念に果たす役割について紹介してみたい。

1 ないものを描いた学祖たち

この地にある九州(帝国)大学は女性に門戸を開放していなかった時代がある。当時、女性にも等しく高等教育の機会とそれに相応しい職をと声をあげたのが、福岡の女性たちであった。この市民運動は実を結び、1923年(大正12年)に、全国初の公立女子専門学校(女専)であり、本学の前身である福岡県立女子専門学校が誕生した。今ある大学の学祖は、福岡の市井の女性であるといえる。当時の寮には、はるか台湾や中国大陸の地から学びを求め、海を越えてくる「留学生」もいた。その後1950年に大学に昇格、1954年には2学部化し、あらたに大学院研究科(修士・博士課程)を設け、高度女性専門人材を育成するに至った。そして2011年、社会の変化に対応して大学改革を敢行し、文と理の2学部を1学部に統合したうえで、国際化を標榜する国際文理学部を発足させた。大学の基本理念は「ないものは創る」の精神を継承した「次代の女性リーダーを育成」であり、目標は「グローバル教養を備え、地域社会と世界を舞台に活躍する女性人材の輩出」である。

1学部のもとには3学科(国際教養学科、環境科学科、食・健康学科)をおき、1学年240名(内20名は外国人留学生)の学生たちは、1年次、全員が寮での共住を通して、生活文化の異なる人との交流と対話により、多元的なものの見方やコミュニケーション力を鍛え、講義棟に出かけては、共通基盤教育科目群を履修し、学問への導入を共に修得することになる。

[写真1]国際学友寮なでしこ外観

2 国際学友寮の生活

日本人学生220名は入学後の1年間、正規留学生20名は4年間、協定校(35大学・部局)から派遣され、英語による国際プログラムを学ぶ30名ほどの交換留学生と共に寮生活を過ごす。キッチン、リビング、バス、トイレ付のユニットでは、4人が個別の部屋を持ち、必ず1人以上の国

際学生がいる環境がつくられている。この環境こそ、言語を鍛え、協調性を育み、グローバルマインドを醸成する場であり、ユニット内で額を集めて決めたルールにのっとり生活することが求められる。

寮では、4名のなでしこメイト（上級生の日本人学生3名と留学生1名）と担当教職員の協力・指導のもとに、14あるフロアの代表が中心になって、円滑な寮運営と諸活動の企画づくりが行われる。全体活動の中心は、毎月曜日の19時に始まる全員出席の「ナデシコ・ナイト」であり、毎週、系統性のある活動が全寮生の参加を得て展開されている。

たとえば4月には、全体オリエンテーション、異文化理解講座、そして体育祭を契機とするチームワークづくりが企画され、5月には共同生活のマナーとユニット内のルールづくり等が続く。寮生同士に共同生活観が生まれると、海外からの留学生による文化講座や日本人学生による県民講座などが開かれるとともに、様々なイベントを通して、互いの違いを受け入れ、楽しむ態度の育成が図られる。もちろん、退寮時のアンケートには、ストレスを感じ、悩んだ体験も散見される。折々に相談にのり、助言を与えて、寮生活を無事終えることができるように相談体制も整えている。

［写真2］ユニット（フラット）間取り図

3 寮から展開する国際化

寮での留学生との交流は、海外に飛びたつ意欲と自信を与え、長短期を合わせれば7割を超す学生が留学を経験する。それを支援する制度も整えている。日本学生支援機構（JASSO）から得られる奨学金と本学独自の支援金を、外国語試験の成績や面接の結果を総合して付与している。また、4年間の在籍期間で卒業要件が満たせるように、受入先の授業で取得した単位は可能な限り本学の対応授業に読み替え、あるいは認定するとともに、先方の学年暦に

柔軟に対応可能なように4学期制を敷いている。

学生たちは帰国すると、留学生を巻きこみ、身につけた言語力の維持・向上と異文化体験の共有を願って、Language Cafe※に参加している。現在9つの言語のカフェが設けられ、そこでの異学年交流により刺激を受けた下級生が留学への動機をさらに強くする、という好循環を生む場となっている。

［写真3］Language Cafe 活動の様子

留学の機会に恵まれない学生には、留学生を交えた宿泊形式のEnglish Villageを開催し、疑似留学体験の機会を提供しているが、100周年を機に、記念の基金を用いて学生全員の留学を目指している。

おわりに

全学対象の学生アンケートでは、国際学友寮での生活体験を高く評価する結果が得られている。卒業時には、キャンパスライフを振り返り、寮生活の思い出が熱く語られる。「次代の女性リーダーを育成」の基本理念は、この寮に始まると言っても過言ではない。共同生活にあって、感性のアンテナを高くして、時にリーダーとなり、時に共感する心をもってフォロワーとなる必要があるからである。共に暮らすことの重要性を知る本学は、さらに2年生対象の第2寮の設置を夢に描いている。それは、国際交流の深化に加えて、地域社会との交流と協働を願ってのことである。

※　学生主体で世界各国の言語や文化を学ぶ活動。多目的スペース等を利用して曜日ごとに異なる言語のカフェを開催し、学生の異文化理解・交流を促している。

国際教育寮「有光寮」の開設と新たな教育の展開

林 智義
関西学院大学国際連携機構事務部課長
（レジデンスセンター担当）

はじめに

現在、関西学院大学は計10寮、総定員数約５２０名の規模で寮を運営している。これまでの寄宿舎の流れをくむ「学生寮」５寮と、外国人留学生の受入宿舎である「国際学生レジデンス」４寮に加えて、日本人学生と外国人留学生に共同生活による学習機会と寮固有の教育プログラムを提供する国際教育寮として、「有光寮」（定員83名）を２０２２年春に開寮した。

２０２０年のはじめより、新型コロナウィルス感染症に伴う政府の水際対策強化によって外国人留学生の入国が制限されており、有光寮の開寮時期を決定した時点では留学生の受入について見通しが全く立てられない状況であった。しかし、これまでにもレジデント・アシスタント（ＲＡ）制度を他寮で試行的に導入していたこともあり、ＲＡの育成や寮教育に一足先に着手したいという思いもあり、開寮に踏み切った。ようやく２０２２年秋より多くの外国人留学生を迎え入れることができ、国際教育寮として本格的に稼働を開始したところである。

［写真１］有光寮の外観

１ 本学の国際化推進と寮政策について

まず、これまでの本学の国際化推進と寮政策について振り返ってみたい。

本学は２０１４年にスーパーグローバル大学創成支援事業（ＳＧＵ）の「グローバル化牽引型」の採択を受け、大学改

革と国際化に鋭意、取り組んできた。世界で通用する人材を育成するための施策として、学生の海外派遣や外国人留学生の拡大を図るとともに、キャンパスで日本人学生と外国人留学生が正課の授業や課外活動を通して互いに融合する「内なる国際化」の推進にも力点を置いている。中でも、寮については日本人学生と外国人留学生が共同生活を通じて多様性を理解し、多文化共生の能力・感覚を涵養（かんよう）できる「学び」の機会の拡充を図ってきた。

こうした方針は、2018年に策定された将来構想「Kwansei Grand Challenge 2039」にも明確に記されている。国際教育寮の設置や日本人学生と外国人留学生の混住型国際教育寮における国際理解教育を進めること、既存の学生寮においても混住化を段階的に進めること、RAの配置を広げていくことなどの寮教育の充実が本学の重要な戦略・施策として位置付けられた。

［写真2］有光寮のラウンジ

2 これまでの寮における国際交流

国際化の推進に伴い、海外協定大学からの受入留学生数は2017年にはSGU採択前の2倍に達した。留学生受入拡大に伴い2016年9月より国際学生レジデンスV（1ユニット4名、定員72名）を開設し、2018年からは日本人学生によるRAを配置した。居住者の多くが海外協定大学からの英語話者の留学生であり、RAは来日時の住民登録等をはじめとする生活支援や生活相談、寮内でのルール作り、交流イベント実施など、留学生をサポートしながら生活を共にし、交流を深めている。RAには一定程度の英語力を求めているため、留学などの海外経験を有し、異文化に対する受容力の高い学生が多い。寮生活で生じるトラブルや課題解決に向けては、英語での寮生との交渉や調整を図ることが求められ、より高度な英語コミュニケーション力やグローバル・リーダーシップを成長させる機会となっている。

また、レジデンスVに先立ち、2015年に移転新築した清風寮（女子学生寮1ユニット5名、定員60名）では、各ユニットで日本人学生4名と外国人留学生1名が共同生活を営んでいる。寮の運営は学生自治に基づいて学生が主体

的に運営しており、両者間で文化や慣習の違いによるトラブルなどが発生することも多々あるが、寮執行部の学生を中心に学生同士が話し合いを重ね、教職員による支援を受けながら、相互に理解を深めて課題を乗り越えることを日々実践している。また、同年に開設したレジデンスⅣ（ツイン、定員52名）は、海外協定大学からの外国人留学生と日本人学生が寝食を共にしながら課題に取り組む短期間の融合プログラムを営む場として活用されている。

このように、留学生のための寮を拡充させるとともに、寮生活を通じたピア・サポートやピア・ラーニングによる国際交流や教育機会の充実に取り組み、並行して既存の日本人学生寮においても外国人留学生との混住化を段階的に進めている。

［写真３］有光寮のキッチン

３ 有光寮の開設

こうした寮における融合を促す中で、「国際教育寮」としての取り組みをさらに一段前進させるべく２０２２年春に開設したのが「有光寮」である。部屋数は全て個室の83室で、うち2室は車椅子でも利用できる構造とした。現在、10名のＲＡを含めた20名の日本人学生と56名の外国人留学生が、共同生活を送っている。日本人学生の入居期間は最大2年間として、寮における国際教育の機会をより多くの学生が享受できるように設計している。

１階はコミュニティスペースとして学生がくつろげるラウンジ、国際交流プログラムやイベントが実施できる約80名収容のグローバルコモンズ、各国の料理の紹介などの食を通じた国際交流ができるオープンキッチン、映画鑑賞や音楽演奏などができる防音シアタールームを設置している。イベント開催時や寮生の招待がある場合は、寮生以外の学生も入館ができ、留学生たちと交流したり、さまざまなイベントに参加したりすることができる。2階以上は居住スペースとなっており、寮生のＩＤカードがなければ立ち入ることができないようセキュリティ管理を行っている。

２階は男性フロア、３階は男女混住フロア、４階は女性フロアとして、ＳＯＧＩや信仰上の希望などに極力配慮できるようにしている。寮生たちは各階に設けられた共用キッ

チンで料理を作ったり、共用ラウンジのモニターで一緒にスポーツ観戦したりしており、寮生同士の密な交流機会が生まれるように工夫している。

4 寮固有の教育プログラム

有光寮では、国際的な寮教育プログラムの実践にも取り組んでおり、現在、3つのカテゴリーに区分したプログラムを提供している。

1.「基礎的な寮教育」として、インクルーシブ・コミュニティおよびハラスメント防止についての研修を行っている。これらにより、寮生活における自らの行動や発言に対して責任を持つ自立性、自分と異なる意見を持つ相手に歩み寄る力、優れたコミュニケーション能力に基づく社会性の体得を目指す。また、寮生活における対人トラブルを未然に回避する知識を学び、ハラスメントの被害者・加害者になることなく、充実した寮生活を送れるようにすることが目的である。

2.「基礎的な国際教育」として、異文化理解研修を実施している。国際寮での経験により伸長が期待される力として、「語学力」「対立する価値を調整する力」「コミュニケーション力」「豊かな人間関係を築く力」「主体的に行動する力」を想定して各種設問を学生に投げかけ、それぞれの力の伸長について学生に自己評価させている。こうした振り返り(Reflection)の機会を提供することで、多文化共生力および異文化コミュニケーション力の向上などの自律的な成長を促している。

3.「実践的な国際教育」として、ピア・ラーニング、地域交流、グローバル・リーダーシップ育成の3つを柱とした教育機会を創出している。

ピア・ラーニングとして、本学の教員や卒業生を招いた教育・キャリアイベントや、学内学生団体等と協力した日本文化体験イベント、RA企画イベントを行っている。例えば、国際会計専門の教員を寮に招いたイベントでは、折り鶴を使ったグループワークを通して、経営効率・会計コスト・チームワーク・コミュニケーションなどを留学生と共に楽しく学んだ。RA企画イベントは長期休暇を除いて毎月実施しており、RAに対するOJT教育効果とともに、寮生の所属意識の向上やコミュニティ強化の効果も大きい。

地域交流としては、西宮市社会福祉協議会を通じてコ

ロナ禍の寮生に食品を寄贈いただいたことを発端にして、地域住民との関わりが始まっている。今後、国際交流ボランティアや地域の学校との交流も進めていく予定である。

グローバル・リーダーシップの育成としては、RA制度を教育プログラムの一環として位置づけ、RAの育成研修を行っている。RAの役割を理解するための採用時研修、課題や改善点を確認するための振り返り研修、留学生の相談相手となるRA自身が適切なセルフケアを行えるようにするためのメンタルヘルス研修、信頼感のあるコミュニケーション術を身につけるための異文化コミュニケーション研修、リーダーシップのスタイルやリーダーのふるまい方を学ぶリーダーシップ研修、ファシリテートテクニックを学ぶミーティング運営研修など、実施可能なところから充実を図っているところである。今夏のRA研修では、英語でリーダーシップとフォロワーシップについて学んだうえで、異文化チームビルディングのポイントについて理解を深めた。合わせてグローバル人材に必須のグローバルマインドセットを理解し、国籍や文化に関係なく良好な人間関係を構築するためのスキルを学んだ。学んだ内容は多文化共生寮の生活の「コツ」として実践できることを意識している。RA研修や活動で得た学びを率先垂範することにより、卒業後も国際的な環境の中でリーダーシップを発揮することができる人材を育成することを目指している。

［写真４］有光寮各階のラウンジ

こうした機会を通じて、学生はコミュニケーション力を高め、多様性への理解を深める。また、地域の人々との交流を通して日本文化・社会について学びながら、さまざまな価値観を身につける。特にRAにとっては、主体的に行動し、企画力・計画遂行能力等を向上させる場となることを狙っている。

［写真５］RA イベントの甲山ハイキング

5 他寮への展開

現在、国際教育寮である有光寮や国際学生レジデンス2寮、清風寮に加え、他の既存学生寮でも日本人学生と外国人留学生の混住化を進めており、本学が運営する全ての寮において共同生活を通して、両者が文化・宗教・習慣・考え方・感じ方の違いを知り、そこから生じる障壁を乗り越えながら、相互の理解を深める学びの場とすることを目指している。

ただし、寮は教育の場であるとともに、寮生にとっては、リラックスできる生活の場でもあることは念頭に置いておきたい。また、既存の学生寮においては、自治的活動として各種当番や委員などの役割分担があることから、寮教育プログラムが、寮生に過度の負担にならないように、寮生の反応や効果を確かめながら、基礎的な寮教育から順次展開していく計画である。

おわりに

2022年4月に、それまで別々の部署が管轄していた国際学生レジデンスと学生寮の業務を取りまとめ、業務の標準化・効率化を図り、寮教育の推進と拡充を行うことを目的としてレジデンスセンターが設置され、その任に就いた。この1年間、各寮の寮生や学内外の関係者と意見を交わして感じるのは、建学の精神に基づいて作られた複数のタイプの寮があるのは、ある面、本学の良き特長でもある、ということである。もちろん、さらなる標準化・効率化は進め、寮内国際交流も加速させるが、それぞれの寮の多様性と個性を大切にしながら、その寮ならではの魅力がさらに増すような「国際化」を実現するために、知恵を絞り、汗を流していきたいと考えている。

コロナ禍で2020年秋からの2年間、海外協定大学からの留学生の受入を停止せざるを得なかった。2022年秋より、ようやく寮において日本人学生と外国人留学生との共同生活が再開し、RAの活動やさまざまなイベントも再始動したところである。さまざまな寮における取り組みも現在、試行段階である。学生の意見に耳を傾け、中長期の具体的な寮教育や運営についての計画をたて、関係者と協力・調整を行い、時として緊急対応が必要な学生に寄り添いながら、より良い寮になるよう力を尽くしたい。

人的教育資源を活用した教員同居型学生寮

木内 佳奈子
神田外語大学学生支援部
シニアマネージャー

はじめに

Kanda Academic English Residence（以下、KAER）は、「英語で暮らす」をコンセプトに2015年に開寮した。神田外語大学では4つ目の直営寮で、初の教育寮である。寮生は寮内で英語を使用し、認定留学を目指して寮独自のプログラムを受講する。同居する本学教員による寮生限定の英語プログラムや、正課で指導するTOEFL専門教員による講座等、本学の人的資源と教育を活用している点が特徴である。

1 学内の国際性

本学は1987年に専門学校神田外語学院の姉妹校として、千葉県千葉市に開設された。2021年のグローバル・リベラルアーツ学部新設まで、外国語学部の単科大学として歩んできた。開学当初より、英語、中国語、韓国語、スペイン語を主専攻として、国内外の専門家が教壇に立ってきた。現在のアジア言語学科のうちタイ、ベトナム、インドネシアの東南アジア3言語の各専攻と、イベロアメリカ言語学科に属するブラジル・ポルトガル語専攻は、2001年に設置された。

2007年には各国の語学専任講師が常駐する多言語学習センターMULC（Multilingual Communication Center）を学内にオープンし、アジア言語学科とイベロアメリカ言語学科の専攻語等、英語以外に特化した学習センターとして、学生と各国からの教員、留学生が日常的に交流する環境を提供している。英語教育については、開学当初よりその中核を担ってきた英語教育研究所ELI（English Language Institute）と2003年設立の自律学習支援センターSALC（Self-Access Learning

Center)を、2017年に学内新施設「KUIS8」(神田外語大学8号館)として展開した。KUIS8には、一生涯にわたる外国語学習の基礎となる自律学習スキルの習得を支援する専門のラーニングアドバイザーを配置、正課外でも英語4技能を実践的に修練するための学習機会をELI教員が提供する。MULCとKUIS8は教室外での学びの場として学習環境も重視して設計され、各種イベントもプログラムされている。また、利用者が気軽に交流や息抜きができる「寛ぎの場」としてのデザイン性にも優れ、学生の人気を博している。

[写真1]MULC内観

[写真2]KUIS8外観

2 本学における国際寮の展開

第1の直営寮は、2000年の交換留学制度開始に伴う交換留学生の受け皿としての寮で、国際交流課職員が家族と住み込みで留学生の支援に当たった。その後、海外協定校と交換留学生数の増加により、2007年に第2の、2011年に第3の国際寮の運営を開始した。学生は英語をはじめアジア言語やイベロアメリカ言語などの環太平洋地域の言語を専攻し、主にそれら言語地域からの交換留学生を受け入れる。これらは「混住型国際寮」として、留学生の受け入れと、外国語とその文化を学ぶ学生の学外での国際交流と異文化理解の機会提供を狙いとした。2019年度の海外協定校への留学派遣は162名、受け入れ交換留学生数は102名で、2022年度現在、新型コロナウイルス感染症と円安の影響を強く受けながらも、留学派遣および受け入れ数は徐々に回復傾向にある。

3 KAER開設の経緯

本学既存寮は、留学生受け入れに加え、建学の理念や

ディプロマ・ポリシーの具現化として、混住による国際交流や異文化理解を目的とした。KAERはこれに加えて、本学の「留学支援」と「自律学習」のエッセンスを取り入れた「英語教育寮」として独自プログラムを提供する。

2015年当時、「スーパーグローバル大学創成支援」や「トビタテ!留学JAPAN」による留学促進の国策に連動し、留学制度の拡充と国際化の強化が各大学で行われ、学生にとって留学はさらに身近になった一方で、産業界や社会が求める人材育成に留学の果たす役割も求められている。

本学の認定留学は最長で1年間である。限られた期間で学生が望む専門領域を現地の言語で十分に学ぶためには、留学目標の明確化、異文化を正しく理解し受け入れる心構え、多様な文化背景を持つ人々と共同生活を円滑に送るための語学力とコミュニケーション能力が不可欠で、留学前の準備として非常に重要である。そのためKAERでは英語での留学を想定し、①「English Speakerとコミュニケートできる語学力」、②「異文化を尊重・受容・理解し、自国文化および自己を発信できる表現力」の向上の2つに重点を置き、寮内外で学内の人的資源を存分に生かした独自プログラムを展開している。

4 寮運営と寮生による自治

KAERのプログラム設計は、留学支援、英語教育支援、学生寮管理、施設管理、財務の学内部署から横断的に職員中心に組織し、英語専攻の学科教員からの助言を受けながら、学長、理事長を決裁者とするプロジェクトとして行った。開寮4年目以降は学生寮主管の学生支援部で学生募集と管理人・教員・RA(レジデントアシスタント)を採用し、教職学協働の寮運営を行う。

在学中に認定留学を目指す英米語学科と国際コミュニケーション学科の1、2年生を入寮対象とし、在寮期間は最長2年間である。学生寮として使用されていた4階建て中古物件を一部リニューアルしているが、部屋のサイズは既存設計のまま面積の異なる3種類となっている。サイズSは1年生、Mは2年生、Lを留学出発前の3年生と留学帰国後に寮に戻るRAの4年生最大2名、そしてプログラムを担当する本学ELI教員がSV(スーパーバイザー)として最大3名入居する。収容定員は1年生12名、2年生12名である。居室内にキッチンやバス・トイレを完備しプライベート空間を確保する一方、各フロア

のコミュニティルームをプログラム実施と交流の場として利用する。また、各フロアに各学年が居住していることをうまく活用したフロア制を導入している。2年生のフロアリーダーが毎月フロアミーティングを開催し、リーダーズミーティングに課題とプログラムの振り返りを持ち寄る。リーダーがそれを各フロアに持ち帰り、情報共有することで寮生自治の基礎としている。

1階部分には日本人配偶者と国際結婚をした本学のELI語学専任講師が管理人として住み込みで寮生に対応する。これまで実に4組の国際結婚世帯が管理人を務め、寮夫寮母として寮生を温かく見守ってきた。管理人のほか、女性SVも住み込みで寮生と住環境を共にし、寮内プログラムの担当に加えて英語使用環境の醸成とコミュニティビルディングに取り組む。

5 KAERの教育プログラム

寮管理人とSV、フロア制とRAの配置を住環境のベースとして、寮内では夜間に、寮外では早朝に学内で、寮生限定プログラムを提供する。

	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri
6:30	起床・朝食				
7:15/8:00	バス移動(KAER→大学)				
On Campus (大学内)					
特別講座 8:00~8:45		TOEFL Intensive Course		TOEFL Intensive Course	TOEFL Intensive Course
1時限 9:00~10:30	英国研究入門				
2時限 10:40~12:10	Freshman English	英語学概論	Foundational Literacies	Freshman English	Freshman English
Lunch Time 12:10~13:10					
3時限 13:10~14:40	フランス語I	English for Academic Purposes	美術史学	フランス語I	英語学概論
4時限 14:50~16:20		Freshman English		Foundational Literacies	English for Academic Purposes
5時限 16:30~18:00			キャリアデザイン		
18:20	バス移動(大学→KAER)				
On Residence (KAER内)					
19:00	夕食・自由時間				
英語プログラム 20:00~22:00		Study Skill-up Workshop (隔週)	One to One Session (15分)	SV Event (月1~2回)	Monthly Cultural Event (月1回)/ RA Event(月1~2回)
23:00	就寝(門限)				

[表]KAERでの一週間(例)

●**TOEFL Intensive Course**は授業期間に週3日、正課1限前に学内教室で行う45分間の早朝英語集中講座である。多くの海外協定校が出願基準にTOEFL iBTを採用しており、留学を目指す寮生の英語力向上と留学先の授業を見据えて集中的に対策を行う。担当教員は正課で指導するTOEFL専門教員で、TOEFL

対策に加え留学先の授業でも通用する質問力と課題発見力、解決策を模索することを通して思考力を鍛える。ベンチマークとして、年間8回行われる学内TOEFLの受験を義務付けている。寮生のスコア分析では、同学科の寮生と非寮生を比較したスコアの伸び率から、講座の成果とベンチマークの有効性を確認している。

● **Journal Session(One to One Session)**は1対1の15分間の個別セッションで、前週の学習や生活について毎週SVと英語で振り返る。専用用紙に日々の活動や思考をジャーナルとして記録し、モチベーショングラフで自身の現在地を可視化する。それを基に英語学習を含む学びへのモチベーション維持や学習方法等について考える。このセッションでは振り返り(Reflection)を重視しており、振り返りの学習への効果についてSVから寮生にメタ認知(自らの認知を客観的に捉えること)的に丁寧に説明を行い、寮生自身がこのセッションの意義の理解を十分に促す。ジャーナル用紙は、本学でアドバイジング講座を受講したSVが、寮生の負担も考慮しながらより効果的な振り返りとモチベーションの維持につながるように、用紙やセッションの形式を日々改良している。

● **Study Skill-up Workshop**は学習方法にとどまらず、大学生の時間や金銭管理、人間関係、健康管理や思考整理など、日々の生活や思考を豊かにするための多様なトピックの内省を促す。従来この枠は、論理的思考と英語発信力を身に付けることを目指した英語プレゼンテーション講座だったが、正課指導内容との重複、また寮生アンケートや寮生活を日々モニターする中で、寮生に必要なスキルやニーズに応じて内容を変更してきた。

● **Monthly Cultural Event**は月に1回海外の文化行事を取り上げ、体験を通して言葉と文化を学ぶ場を提供する。ELIには世界中からの英語教員が在籍しており、KAERに講師として招いて英語圏以外の文化行事をトピックとすることもある。英語や世界の文化の多様性に触れ、留学疑似体験ができる機会として寮生に人気がある。

● **SV Event**は、住み込みのSVがそれぞれ月1回提供するソーシャルイベントで、コミュニティビルディングを目的としたさまざまなアクティビティを行う。よりカジュアルでリラックスした時間の中で、SVが寮生同士の英語使

用促進をサポートする。これは、2020年の新型コロナウイルス感染症の発生でプログラムの全面オンライン化を余儀なくされ、寮生間の交流が希薄になることを懸念し導入された。対面に切り替わってからも寮生の関係構築に大いに役立っている点を評価し、継続している。

●RA Session・RA Eventは[表]KAERでの一週間(例)には記載がないが、RAが担当し、月1回提供されている。RAは認定留学経験のある3年生または4年生最大2名で、下級生の指導サポートを担う。RA制度は寮生の身近なロールモデルとして、またRA自身の留学後の英語の維持向上とリーダーシップ育成の機会と位置付ける。RA SessionではRAが寮生と個別に面談し、学習や生活の悩みに親身にアドバイスを行う。RA Eventでは、RA自身の留学準備や留学先での経験、また大学4年間を通じて培った下級生に有用な内容を題材として、ワーク形式で情報の提供と助言を行う。

KAERは大学からバスで30分の距離にあるため、授業期間中は毎朝7時15分寮発と毎夕18時20分大学発の寮生専用バスを運行し、学内早朝講座と夜間寮内プログラムへの参加を可能とする。専用バスには、時間割によって日々の起床時間などが異なり乱れがちな、大学生の生活リズムを整えるという狙いもある。KAERの寮生には正課の予習復習や課題に加えてプログラム全てに参加義務があるため、時間と健康の管理が非常に重要になる。寮生同士の声の掛け合い、またSVやRA、そして管理人と職員とが密に連携を取り、寮生活をサポートしている。

寮生には次年度の更新意思確認の際にアンケートを実施している。アンケートでは「寮の住み心地」「人間関係」「プログラム」の満足度を問うほか、各種プログラムの満足度と英語および学習に関するスキルの向上と取り組み姿勢に関する自己評価を、ポイントと自由記述で回答する。寮の満足度は9割以上が最高評価で、記述内容から寮生同士の切磋琢磨する姿勢とそれをサポートするSVやRAの存在が寮全体の良い雰囲気を醸成していることがうかがえる。プログラムにはほとんどの寮生が高い満足度を示す一方、取り組み姿勢へはやや厳しい自己評価の傾向がある。ただ、そこから新たな課題を自ら発見し、寮内での取り組み強化や学内学習施設サービスの利用増、

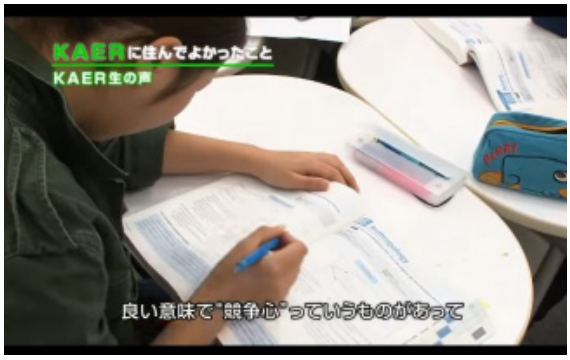
学習方法の変更等、具体的な対策を自ら計画し提示している点においては、プログラムによる振り返りの習慣化とそれに基づき行動を計画するというサイクルが身に付いていることを表していると評価できる。

第1期生も今年で社会人5年目を迎える。今回、本稿執筆に当たり、久しぶりに1期生に当時の話を聞いた。まだ先輩もおらず、プログラム案内があるだけの未知の当時、入寮前にどのような印象を持っていたのか。留学のための英語力を付けるサポート、自身のスキルアップに最適な環境、同居する先生との学外でのぜいたくな英語学習と交流時間、そして少人数のメリットが入寮の動機としてあった。寮生活で得たこととして、英語力、忍耐力、自信、そして寮の仲間を挙げている。早起きが大変であったという一方で、取り組んだ分だけ力が付くことを実感し、そこからさまざまなことに取り組む自信が持てるようになったと話す。また、寮生でコミュニティルームに頻繁に集い自主勉強会や交流があったことで、実家から離れて暮らす寂しさや不安を取り除けたこと、良い意味で留学枠を競うライバルとして切磋琢磨し刺激し合ったことを一様に振り返っている。現役の後輩に向けて、留学への励まし、大変なことも後で良い思い出話になるといったメッセージを多数受け取ったので、その一つを紹介したい。

「自分の力を付けるために努力できる時間が豊富にあるのは大学生の今この時期です。それをKAERはしっかりサポートしてくれます。経験と人は、自分を豊かにします。KAERで得るものはたくさんあるので、挑戦し続けてみてください」

開寮当時を振り返りつつ、現役生へもらったメッセージから、運営側としても活力をもらうことができた。

[写真3]KAER 寮生の声①



[写真4]KAER 寮生の声②

(画像は KAER プロモーション動画より)

6　10年目とその先に向けて

KAERで学び、留学に旅立ち、留学後にRAとして寮に戻り後輩の育成支援に従事するというサイクルも、軌道に乗って久しい。しかし、2020年春からの新型コロナウイルス感染症の影響は、学生の留学という在学中の大きな目標を目前で打ち砕き、KAERのコンセプトをも揺るがした。在学中の留学再開はかなわないかもしれないという暗い雰囲気が漂う中、寮生のモチベーションを支えるために一同奔走した。その中でKAERができることに懸命に取り組む寮生と教員の姿から、英語で学んで暮らすKAERの意義を改めて実感することができた。

寮生の多くは県外遠方の出身者である。20名ほどの寮生と教員数名が同居する極めて小規模な寮だが、家族のようなアットホームな環境を教職員と寮生が一緒に作り出している。同じ目標に向かい切磋琢磨する環境は、明確な寮のポリシーとそれを具体化する寮生限定のプログラムの上に、寮生の強い帰属意識と真摯に取り組む姿勢により日々醸成されている。

KAERは今年9期生を迎える。寮生の留学や英語力向上は実績となり、一定の成果を上げてきた。教育寮が修学支援に資する可能性を確信し、より多くの学生への教育寮の展開を見据え、今年からは英語以外の専攻言語の学生もKAERに迎え、教育寮における学生の能力向上と修学支援に引き続き取り組んでいく。